

昭和三十八年四月二十七日ご講演「学生生活と実社会」の一節

「人間形成と自叙伝の味読」

和敬塾理事 原安二郎先生

人間形成ということについて、もう一つ申し上げたいのは、ちょうどあなた方の時代に、時間があれば、人の伝記を読むということです。人生を教わるには、指導教授もあるし、教科書もある。しかし、人間をつくること、人生行路を知るには、やっぱり先輩の伝記を読むことです。知っている人の中でも、知らない人の中でも、海外の人でも、日本の人でもよろしい。これは非常に大切なことです。

しかしながら、現在の伝記の在り方、殊に日本の伝記の在り方というのは、本人が亡くなった後に、その後輩が、そのお弟子さん達が、大體、後に偉くなったところをほめ上げて書いています。プロミネントなポジションにいて、世間に非常に知られた政治家・実業家・宗教家・学者——この人達の、存外若い頃がわからないのですね。それを、あなた方のような若い人達が見ると、とても自分達は、こんなに偉くなれないぞと思う。

ところが、そうではない。この人達も、若いときには失敗もあるし、落第もあるし、人に排

斥されたこともあった。そういうしくじりをいろいろ積み上げて、悪いところはなおし、言いところは助長し、それで大成したのである。これが大家の履歴である。

それで、私は、もし諸君が読むならば、「自叙伝を読みなさい」と申したい。自分で書いたものには、自分の子供の時から状況を正直に書いてある。その自叙伝は、日本には少ないです。福沢先生の『福翁自伝』というような、時事新報に、明治四十四、五年頃、先生が亡くなるちよつと前に書いたもので、ご自身のことを正直に書いてある。

外国には多くあります。まあ、一番よく知られているのは、ルソーの『懺悔録』——これは自叙伝です。それからソ連のクロポトキンの『ある革命家の日記』、それから、英国では、ジョン・スチュアート・ミル、アメリカ人ではベンジャミン・フランクリン——この人達の伝記は自分の亡くなる十年乃至二十年前から書いている人ですから、記憶は立派です。

福翁自伝もなかなかちゃんと書いてある。こ

れは自分のことですから、失敗も書いてあるんです。若い時に憶病で、手術室にとびこんで、自分は卒倒したという話も書いてある。泥棒に追いかけて、縁の下にもぐりこんだという話も書いてある。

まあ、こんな人もこんなことがあったのかと親近感をもつのです。それで読むうちに、自分もこんなことがあったが、これらの先輩も失敗を調整して成功した人だ、悪いところを捨て、良いところを取ったんだと、こういう人間形成の経路や結果がよくわかるわけです。それで、私は、人間の形成を目的としている和敬塾の塾生諸君に、諸君の人間をつくる一つの方法として、立派な先人の自叙伝を味読するようにおすすめする次第です。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。